



学校法人  
鎌倉女子大学

## 天才もまた努力によって

時は1929年4月12日、所は爛熟<sup>らんじゆく</sup>した近代文化が咲きほこるドイツの首都ベルリン、神童といわれたバイオリニスト、ユーディ・メニューインのデビュー演奏が終わり、なりやまない拍手の中、感動のあまり舞台上に駆けあがったアルベルト・アインシュタインは、この12才の少年を抱きかかえて、こう叫んだという。「今日、君は、証明してくれた。天上に神が存在することを！<sup>※</sup>」と。

時は下って、ちょうど80年後の2009年6月7日、所はテキサス州フォートワース、正にそのシーンが繰り返えされたといっている。

ピアノの鍵盤をたたき続けているかのように、こきざみに指を動かし続けている20才の辻井伸行君をたまらず抱きかかえた、既に白髪となった往年のピアニストのヴァン・クライバーン、伸行君に何と語りかけたのだろうか、ただ黙って抱きしめただけだったのだろうか。

辻井伸行君の出現は、やっぱり天才という人間がこの世の中には確かに存在するのだということをあらためて知らしめた出来事であったように思う。

勿論、天才とここでいうのは、伸行君が何の努力もせずに今日の栄冠を勝ち得たという意味ではまったくない。むしろ、驚きは、それとは正反対のところにある。私たちが伸行君に圧倒されるのは、彼の不屈の努力が彼の天賦の才能を引き出したということにある。殊<sup>こと</sup>に楽譜が使えない伸行君が自分の音を創り出すまでには、どれほどの努力を要したことだろう。人間の才能が、それが天の与えた才であったとしても、いつの場合にも、人間の努力によって引き出されるものであることを、これほどまで純粋に、これほどまで明瞭に私たちに教えてくれたことはなかったように思う。そして、何よりも彼のピアノが既に最高の水準に達していることを証<sup>あかし</sup>するものは、彼が奏<sup>かな</sup>でる輪郭鮮やかな音色に耳を傾けていると、彼が盲目か否かということなど、まったくどこかに消え去ってしまっているところにある。

「天才は芸術のための才能である<sup>※※</sup>」といったのは、あの大哲学者のカントであったが、誰にもはっきりと天才性というものを判<sup>わか</sup>らせてくれる分野は、カントがいう通り、何といっても芸術の分野がその最たるものかも知れない。もっとも、イチローも、<sup>バンテオソ</sup>全ての神々の世界に連なる、そうした一人といえようが……。それもそのはず、彼の生きる世界はベースボールであるにしても、その妙技は、いつの場合にも、実に芸術的ではないか。

ご両親のお喜びは、如何ばかりであろう。お母さまが、わが子の音に対する鋭敏な感覚に気づいたのは、伸行君が8カ月の頃、ショパンの「英雄ポロネーズ」にあわせて身体で上手に調子を取り始めた時のことだそうだ。これがきっかけとなって、1歳5カ月の時に、

ピアノのレッスンを受けさせはじめ、その経験が、今ではすっかり有名になった、お母さまが台所で料理をしながら口ずさんでいた「ジングルベル」にあわせて、両手で卓上ピアノを弾き始めたという、あの2歳の時のエピソードにつながっていく。隣の部屋から聴こえてきた音を耳にした、その瞬間のことを想像するだけでも、私たちがさえ、得も言われぬ思いに襲われてくる。

戦後の著名な哲学者・教育学者であったボルノーは、「成長を急がせることもなく、また適切な瞬間を逃がすこともなく、教育者は時間との調和のなかで生きなければならない<sup>\*\*\*</sup>」といったが、この意味で伸行君のご母堂は、熟した時を直感出来る教育者でいらしたのであろう。

米ソ冷戦の激しい時代、第1回チャイコフスキー国際コンクールで、首相以下共産党政府要人が居並ぶ中、優勝し、大統領初めアメリカ国民に熱狂的に迎えられたヴァン・クライバーン、一躍スーパーアイドルになったが、その後、あまりにも多忙な演奏生活、そして人々からチャイコフスキーのピアノ曲ばかりを要求され続けたあまり、一時期、極度の精神障害を起こしてしまっていたと聞いたことがあった。昔から、真実は、見るものでなく、聴き取るものだという。クライバーンを記念したコンクールでの優勝だけに、氏の経験に学びつつ、いわゆる<sup>ヴィルトゥオーゾ</sup>名手というよりも、むしろ伸行君ならではの内面の深みを表現出来る重厚なピアニストへと、急ぐことなく、ゆったりと育てて行ってほしいと思う。

さて、このニュースが流れた数日後のこと、帰宅すると、案の定、食堂のテーブルの上にディスクがおいてあった。佐渡裕の指揮によるベルリン・ドイツ交響楽団とジョイントしたラフマニノフのピアノ<sup>コンチェルト</sup>協奏曲二番のCDと、その時の録音風景を撮ったDVD。

それにしても、革命から逃れ、独裁者スターリンの帰国要請を拒否し、亡命者として最期を異国でまっとうした物語性も働いて、故郷ロシアへの憧憬が結晶化したラフマニノフの音楽は、チャイコフスキーよりチャイコフスキー的で、何と甘美で、繊細なことか。

※ アインシュタインの発言には、伝聞により若干の違いがあるが、本文では、(財)民主音楽協会編『ユードー・メニューインの軌跡』を使用させて頂いた。

※※ カント著『判断力批判』篠田英雄訳 岩波書店。

※※※ ボルノー著『人間学的に見た教育学』浜田正秀訳 玉川大学出版部。なお、ボルノーの三つの重要著作の一つといわれる『練習の精神 一教授法上の基本的経験への再考』が、今年6月、鎌倉女子大学学術研究所の出版助成を受け、九州大学名誉教授の岡本英明氏の監訳によって北樹出版から刊行された。

[>前のページへ戻る](#)